埼玉親善大使レポート

金澤　唯依
留学先：タイ・バンコク

1. PR内容

埼玉県のPRについて、私はまず埼玉県産のお菓子を紹介しました。川越芋のタルト、狭山茶の羽二重餅、渋沢栄一がプリントされたサブレを配りました。タイで日本食はとてもなじみがある文化で、特に餅や抹茶は人気がありますが、タイで飲む抹茶はとても甘いため、日本の茶菓子とのギャップをどう感じるか心配でした。しかし、配ったお菓子の中で一番人気があったので安心しました。さらに、自分の地元である川越にフォーカスしてPRを行いました。私が日本に帰国した後に、日本に観光に行きたいという友達が数人いたので、地元川越を案内することを提案し、川越の歴史や街並みについて紹介し、一緒に旅行の日程を考えました。京都や浅草などの日本の歴史を感じられる場所を訪れたいとみんな口をそろえて言っていたのもあり、川越を紹介した時も好印象でした。さらに、川越は「小江戸」と呼ばれるほど情緒ある町並みが残っており、蔵造りの建物や時の鐘など観光資源も豊富で、友人たちにとっても魅力的に映ったようでした。

埼玉，川越産のお菓子を留学先の友達に配る際の写真

2. 現地での生活について

留学中の生活についてですが、想像していたほど大きなカルチャーショックは感じませんでした。お米を中心とした食文化で食べやすい料理が多く、気候も一年を通して夏のようですが、日差しがそれほど強くないため快適に過ごすことができます。日本との生活スタイルの違いで特に印象的だったのは、タイムマネジメントの感覚です。日本では時間厳守が当たり前ですが、タイでは多少の遅れはあまり気にされず、予定が急に変更されることも珍しくありません。友人との約束では遅刻やドタキャン、当日の急な誘いが日常的で、最初は戸惑いましたが次第に慣れていき、私自身も時間に少しルーズになっていることを実感しています。そのため、日本に帰国した後にすぐ適応できるか不安を感じています。また、人との距離感の近さにも驚かされました。友人やクラスメイトは非常にフレンドリーで、初対面でも気軽に話しかけてくれます。さらに、全体的に物事を楽観的に捉える人が多い点も印象的でした。問題が起きても深刻になりすぎず、「なんとかなる」という雰囲気があり、その考え方に触れることで失敗やトラブルに対して過度に不安を抱かなくなり、気持ちが楽になりました。こうした生活面での違いは、私の価値観を見直す大きなきっかけとなっています。一方で、日本にはコミュニケーションの中で空気を読み、互いに気を配り合うハイコンテクストな文化が根付いており、その違いを改めて意識するようになりました。

3.留学先での活動内容

留学生活と日本語アシスタントティーチャーの活動を通して、コミュニケーション能力と語学力を大きく向上させることができました。タイでの生活では、友人や現地の人々との交流を通して、自分から積極的に話しかけたり新しいことに挑戦したりする姿勢が身につきました。また、タイ語や英語を使ってコミュニケーションを取る機会が増えたことで、異文化への理解や関心も深まりました。日本語アシスタントティーチャーとしては、相手に分かりやすく伝えるためには事前準備だけでなく、相手の反応や理解度に応じて説明方法を柔軟に変えることが重要であると学びました。さらに、日本語専攻の学生と東洋大学の学生との交流活動では、双方の意見を聞きながら橋渡し役を務めることで、コミュニケーションには語学力だけでなく相手を理解しようとする姿勢が大切であることを実感し、また、日本語と文化の関わりについての理解も深まり、多様な価値観に触れながら視野を広げることができました。これらの経験は、今後の学びや社会生活において大きな財産になると考えています。

日本語専攻の学生にメッセージを書いてもらう様子

授業後の様子